

〔原著〕

両親の職業への態度が就職活動中の両親からのサポートの活用に及ぼす影響

筑波大学人間系：水野 雅之
茨城県立医療大学人間科学センター：佐藤 純
筑波大学人間系：濱口 佳和

The effects of parents' attitude toward occupation on utilization
of supports from parents in job-hunting

Masashi Mizuno, Jun Sato and Yoshikazu Hamaguchi

問題と目的

近年、就職活動は非常に過酷な選抜競争の中で行われている。新聞報道によると、不採用を繰り返し経験することによって、抑うつ状態に陥ったり、自己肯定感が低下するなど、精神的健康を害する学生が増えているという（朝日新聞、2010）。実証研究においても、就職活動には不安やストレスが伴うことが示されている（北見・茂木・森、2009；松田・永作・新井、2010；Saka, Gati, & Kelly, 2008など）。

また、就職活動は学生にとって新奇な活動であり（下村・堀、2004）、その過程で生じる課題を自身の力のみで解決していくことは難しい。どのようにエントリーシートを書くのか、どのように面接で自己アピールをするのかといった目の前の採用活動に関わる具体的なレベルの不安から、自分にあった職業とは何だろうか、自分はどのような職業について人生を送りたいのかなど、生き方や人生に関わる深いレベルまで、学生は様々な悩みや問題に直面する。

これらの悩みのうち、どのような職業につき、どのように生きるかは両親からの影響を強く受ける。たとえば、学生の就業意識は親の職業の影響を受けること（佐藤、2015、2016）、親の職業への態度が学生の職業未決定に影響を及ぼすことが示されている（鹿内、2005）。そこ

で、本研究は就職活動中の両親からのサポートに注目することとする。

就職活動中の両親からのサポートについて検討した水野（2015）は、就職活動不安が高まった際には父親からのサポートが活用され、そのサポートは就職活動の活動量の向上に寄与することを示した。また、斎藤・梅崎・田澤（2015）は親と就職活動のことを相談できる関係にあることが、親子関係の満足感を高め、内定の獲得につながる一方で、親に就職活動の状況を聞かれることは親子関係の満足感を低め、内定の獲得を阻害することを明らかにしている。さらに、松田・前田（2007）は男性については、両親からのサポートが進路選択自己効力感を媒介して、進路選択への関与を促すが、女性については、友人からのサポートが進路選択自己効力感を媒介して、進路選択への関与を高めることを示した。

また、直接的にサポートに注目して検討を行った研究ではないが、女性では母親へのアタッチメントが安定しているほど、進路選択自己効力感が高いが、男性では両親に関する要因は進路選択自己効力感に影響を及ぼさないことが明らかにされている（Lease & Dahlbeck, 2011）。一方で、男性では母親の支持的態度が職業未決定や就職活動の不安の低さと関連しているが、女性では父親と母親の指示的な態度が職

業未決定の強さと関連していた(鹿内, 2012)。

以上のように、性別や親と学生の性別の組み合わせによって知見が異なるものの、両親からのサポートを活用することはおおむね進路選択や就職活動に良好な影響を及ぼすといえる。しかしながら、このように両親のサポートは良好な影響力を持つにも関わらず、これまで両親からのサポートの活用を促進する要因や抑制する要因については検討されてこなかった。そこで、本研究では親の職業への態度が就職活動中の両親からのサポートの活用にあつては影響を明らかにすることを目的とする。

なお、分析の際には性差も検討に加える。これは、大学生の父親と母親との関わり方は性別によって異なると考えられるためである。具体的には、男性は女性よりも父親を自身のキャリアにおけるモデルと考え、女性は男性よりも母親を自身のキャリアにおけるモデルと考える可能性がある。実際、松田・前田(2007)やLease & Dahlbeck(2011)、鹿内(2012)では、性別によって親からのサポートや親との関係性の効果が異なっていた。そこで、本研究では親の態度を分析する際には、性差を検討に加えることとする。

方 法

調査対象者

就職活動を経験した、大学4年生163名(男性40名、女性123名)および大学院修士課程2年生20名(男性13名、女性7名)から回答を得た。調査対象者の平均年齢は22.04歳($SD=0.97$)であった。

調査時期および調査手続き

2013年12月に、インターネット調査会社マクロミルを通じて、ウェブ上で質問項目への回答を求めた。

調査内容

(1) デモグラフィック変数

学年、年齢、性別の記入を求めた。

(2) 就職活動中のサポート資源活用尺度

水野・佐藤(2014)によって作成された、就職活動に関するサポートを実際に活用した程度を測定する尺度である。9下位尺度27項目から構成されているが、本研究ではそのうちの両親からのサポートの活用に関する3下位尺度である「父親からのサポートの活用」、「母親からの道具的サポートの活用」、「母親からの情緒的サポートの活用」9項目を使用した。回答にあつては、就職活動中のことを振り返り、「まったくあてはまらない(1)」から「とてもあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

(3) 親の態度認知尺度

鹿内(2005)によって作成された、仕事や職業、子どもの進路に関する両親の態度を、子どもがどのように捉えているか測定する尺度である。塚脇・森永・坪田・柘植・平川(2012)による探索的因子分析の結果から、6下位尺度のうち「父親モデル」、「父親指示的態度」、「母親モデル」、「母親指示的態度」の4下位尺度17項目を使用した。

「父親モデル」と「母親モデル」はそれぞれ、父親または母親が職業人としてのモデルになると認知している程度を、「父親指示的態度」と「母親指示的態度」はそれぞれ、父親または母親が進路選択や就職活動に関して指示的であると認知している程度を測定している。回答にあつては、就職活動中のことを振り返り、「まったくあてはまらない(1)」から「とてもあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

倫理的配慮

調査に関する説明として、調査への協力は自由意思に基づくこと、調査に回答しないことによって不利益を被ることはないことを明記した。なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て、実施された。

結 果

基本統計量と α 係数、下位尺度間の相関係数の算出

各尺度の下位尺度ごとに加算平均を求め、下位尺度得点とした。平均値、標準偏差、 α 係数、下位尺度間の相関係数を Table 1 に示す。 α 係数は「母親指示的態度」のみ $\alpha = .60$ と低いが、その他の下位尺度は $\alpha = .79-.92$ であり、一定の内的一貫性が確認された。

次に下位尺度間の相関係数の結果について述べる。まず、就職活動中のサポート資源活用尺度の3下位尺度間には有意な中程度の正の相関が示された。また、就職活動中のサポート資源活用尺度と親の態度認知尺度の下位尺度間では、「母親からの情緒的サポートの活用」と「父親指示的態度」を除く、すべての下位尺度間で有意な弱い正の相関または有意な中程度の正の相関がみられた。最後に、親の態度認知尺度の下位尺度間には、「父親モデル」と「母親モデル」間で有意な弱い正の相関が、「父親指示的態度」と「母親指示的態度」および、「母親モデル」と「母親指示的態度」との間に有意な中程度の正の相関が示された。

親の態度認知尺度のクラスター分析

学生が親の職業への態度をどのように認知しているのか総体的に捉えるために、親の態度認知尺度の4下位尺度を標準化した上で、K-means法によるクラスター分析を行った。ま

ず、親の職業への態度の認知に性差がある可能性があるため、男女別に分析を行ったところ、それぞれ異なる特徴を持ったクラスターがみられた。

男性の分析では、クラスター数を2つから順に増やしていき、解釈可能性から4つのクラスターを採用した (Figure 1)。クラスター1は「父親モデル」と「母親モデル」の得点が高いことから「両親モデル群」($n=12$)と、クラスター2は「父親指示的態度」と「母親指示的態度」の得点が高いことから「指示的両親群」($n=25$)と、クラスター3はいずれの下位尺度得点も低いことから「無関心な両親群」($n=6$)と、クラスター4は「父親モデル」の得点が高いことから「父親モデル群」($n=10$)と命名した。

女性の分析でも、クラスター数を2つから順に増やしていき、解釈可能性から4つのクラスターを採用した (Figure 2)。クラスター1は「母親指示的態度」の得点が高いことから「指示的母親群」($n=18$)と、クラスター2はいずれの下位尺度得点も低いことから「無関心な両親群」($n=15$)と、クラスター3は「父親モデル」と「母親モデル」の得点が高いことから「両親モデル群」($n=54$)と、クラスター4は「父親指示的態度」と「母親指示的態度」の得点が高いことから「指示的両親群」($n=43$)と命名した。

Table 1
基本統計量と α 係数、下位尺度間の相関係数

	平均値	SD	α 係数	相関係数						
				1	2	3	4	5	6	7
1 父親からのサポートの活用	2.21	1.18	.86	—	.52**	.48**	.29**	.40**	.22**	.20**
2 母親からの道具的サポートの活用	2.16	1.15	.88		—	.62**	.06	.21**	.45**	.32**
3 母親からの情緒的サポートの活用	2.79	1.37	.92			—	.17*	.09	.45**	.24**
4 父親モデル	3.46	0.96	.82				—	.10	.35**	.12
5 父親指示的態度	2.30	1.03	.79					—	.09	.40**
6 母親モデル	3.22	1.03	.86						—	.47**
7 母親指示的態度	2.89	0.76	.60							—

注) * $p < .05$, ** $p < .01$

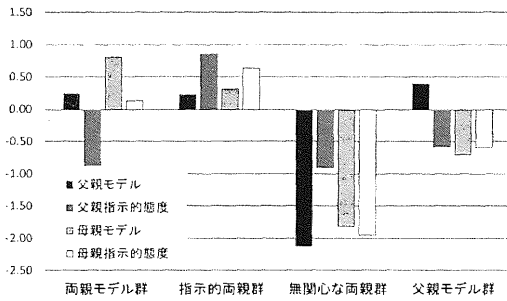


Figure 1. 親の態度認知尺度に関する4クラスターのプロフィール (男性)

親の職業への態度が就職活動中の両親からのサポートに及ぼす影響

次に、親の職業への態度の認知が就職活動中の両親からのサポートに及ぼす影響を検討するために、親の態度認知尺度によるクラスターを独立変数とし、「父親からのサポートの活用」と「母親からの道具的サポートの活用」、「母親からの情緒的サポートの活用」を従属変数とする1要因分散分析を男女別に行った (Table 2, Table 3)。

まず、男性については、いずれの両親からのサポートにおいても、クラスターの主効果が有意であった (「父親からのサポートの活用」 $(F(3,49) = 10.16, p < .01, \eta^2 = .42)$ 、「母親からの道具的サポートの活用」 $(F(3,49) = 5.04, p < .01, \eta^2 = .24)$ 、「母親からの情緒的サポートの活用」 $(F(3,49) = 4.74, p < .01, \eta^2 = .23)$)。

そのため、Tukey法による多重比較を行ったところ、「父親からのサポートの活用」については、「指示的両親群」が他の群よりも有意に得点が高かった。また、「母親からの道具的サポートの活用」については、「指示的両親群」が「父親モデル群」と「無関心な両親群」よりも有意に高い値を示した。最後に、「母親からの情緒的サポートの活用」については、「両親モデル群」と「指示的両親群」が「無関心な両親群」よりも有意に得点が高かった。

次に、女性については、いずれの両親からのサポートにおいても、クラスターの主効果が有意であった (「父親からのサポートの活用」 $(F(3,126) = 5.69, p < .01, \eta^2 = .12)$ 、「母親から

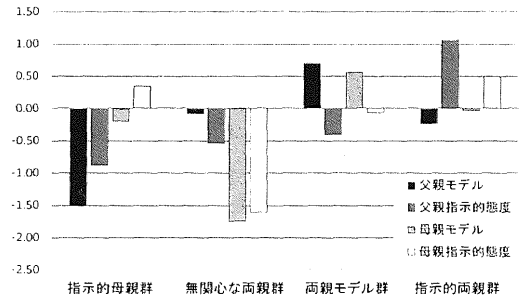


Figure 2. 親の態度認知尺度に関する4クラスターのプロフィール (女性)

の道具的サポートの活用 ($F(3, 126) = 3.93, p < .01, \eta^2 = .09$)、「母親からの情緒的サポートの活用」 $(F(3, 126) = 4.17, p < .01, \eta^2 = .09)$)。

そのため、Tukey法による多重比較を行ったところ、「父親からのサポートの活用」については、「指示的両親群」と「両親モデル群」が「指示的母親群」よりも有意に得点が高かった。また、「母親からの道具的サポートの活用」については、「指示的両親群」と「両親モデル群」が「無関心な両親群」よりも有意に高い値を示した。最後に、「母親からの情緒的サポートの活用」については、「両親モデル群」が「無関心な両親群」よりも有意に得点が高かった。

考 察

本研究の目的は、親の職業への態度が就職活動中の両親からのサポートに及ぼす影響を明らかにすることであった。

まず、親の態度認知尺度の下位尺度得点を用いて、男女別にクラスター分析を行ったところ、それぞれ4クラスターが抽出された。両親ともに職業人としてのモデルになると認知している「両親モデル群」、両親はともに自身の就職活動に関して指示的である「指示的両親群」、両親ともにモデルにならず、指示的な関与も少ない「無関心な両親群」の3クラスターは男女ともに共通の特徴を持ったクラスターであった。しかし、残りの1クラスターには性別による違いがみられ、男性では父親をモデルと認知している「父親モデル群」が、女性では母親が指示

Table 2
クラスターを要因としたサポートの活用に関する1要因分散分析の結果（男性）

		両親モデル群	指示的両親群	無関心な両親群	父親モデル群	クラスターの主効果	
						F値	η^2
父親からのサポートの活用	M	1.81	3.05	1.00	1.73	F=10.16**	.42
	SD	0.67	1.05	0.00	1.06	df=3,49	
						指両>両モ:父モ:無	
母親からの道具的サポートの活用	M	2.08	2.77	1.06	1.63	F=5.04**	.24
	SD	1.08	1.26	0.13	1.16	df=3,49	
						指両>父モ:無	
母親からの情緒的サポートの活用	M	3.03	2.87	1.11	2.03	F=4.74**	.23
	SD	1.17	1.18	0.27	1.54	df=3,49	
						両モ:指両>無	

注1) 両モ:両親モデル群, 指両:指示的両親群, 無:無関心な両親群, 父モ:父親モデル群

注2) ** $p<.01$ Table 3
クラスターを要因としたサポートの活用に関する1要因分散分析の結果（女性）

		指示的母親群	無関心な両親群	両親モデル群	指示的両親群	クラスターの主効果	
						F値	η^2
父親からのサポートの活用	M	1.39	1.67	2.31	2.53	F=5.69**	.12
	SD	0.56	1.02	1.24	1.18	df=3,126	
						指両:両モ>指母	
母親からの道具的サポートの活用	M	2.13	1.27	2.25	2.33	F=3.93**	.09
	SD	1.31	0.64	1.04	1.12	df=3,126	
						指両:両モ>無	
母親からの情緒的サポートの活用	M	2.50	2.00	3.27	2.87	F=4.17**	.09
	SD	1.52	1.36	1.33	1.27	df=3,126	
						両モ>無	

注1) 指母:指示的母親群, 無:無関心な両親群, 両モ:両親モデル群, 指両:指示的両親群

注2) ** $p<.01$

的であると認知している「指示的母親群」が抽出された。

男性において「父親モデル群」が抽出されたのは、男性にとって父親は社会人としてのロールモデルであるためであると考えられる。一方、女性において、「父親モデル群」が抽出されなかったのは出産や育児を経験する可能性のある女性にとって、父親は必ずしも社会人としてのロールモデルとはならないためであろう。

また、高木・柏木（2000）は、母親は息子に対するよりも娘に対する期待が高く、特に娘の人生に関与したいという感情が強いことを明らかにしている。女性において、「指示的母親群」

といったクラスターが抽出された背景には、このような母娘関係があると推察される。

次に、親の態度認知尺度によって分類されたクラスターを独立変数とし、「父親からのサポートの活用」および「母親からの道具的サポートの活用」、「母親からの情緒的サポートの活用」を従属変数とした1要因分散分析を男女別に行った。

まず、「父親からのサポートの活用」については、男性でも女性でもクラスターの主効果が有意であった。多重比較を行った結果、男性は「指示的両親群」が他の3群よりも有意に高く、女性は「指示的両親群」と「両親モデル群」が

「指示的母親群」よりも有意に高かった。

「両親モデル群」と「指示的両親群」、男性における「父親モデル群」は自律的な形であれ他律的な形であれ、父子間で就職や職業が話題に上がる群であり、「無関心な両親群」と女性における「指示的母親群」は父子間におけるコミュニケーションが希薄な結果、どのような形でも父親との間で就職や職業についての話題が取り上げられない群である。そのため、少なくとも前者の方が後者よりも、父親のサポートを活用していると考えられる。

加えて、男性では両親からの関わりが過干渉な傾向にあると推察される「指示的両親群」は、自律的に職業について考えるきっかけが提供されるであろう「両親モデル群」と「父親モデル群」よりも、父親からのサポートが活用されていた。これは、学生が困った事態に直面してはじめて、父親からのサポートを活用するのではなく、父親からの関わりが多いため、受動的にサポートを活用する場面が多くなるためであると推察される。

また、「母親からの道具的サポートの活用」については、男性でも女性でもクラスターの主効果が有意であった。多重比較を行った結果、男性では「指示的両親群」が「父親モデル群」と「無関心な両親群」よりも得点が高く、女性では「指示的両親群」と「両親モデル群」が「無関心な両親群」よりも得点が高かった。すなわち、「指示的両親群」と「両親モデル群」は母親の関与が平均以上にあるため、そうではない「無関心な両親群」や男性における「父親モデル群」よりも、母親からのサポートを利用していたと考えられる。

さらに、「母親からの情緒的サポートの活用」については、男性でも女性でもクラスターの主効果が有意であった。多重比較を行った結果、男性は「両親モデル群」と「指示的両親群」が「無関心な両親群」よりも有意に得点が高く、女性では「両親モデル群」が「指示的母親群」よりも有意に得点が高かった。このように他の2つのサポートの活用の下位尺度とは異なり、「母親からの情緒的サポートの活用」では「両親モ

デル群」の影響が強かった。これは、つらい気持ちを理解してくれるなど、感情面のサポートである「情緒的サポート」の特徴によるものであると推察される。

全体的に男性ではおおむね「指示的両親群」が両親からのサポートの活用に影響力が強かった。それに対して、女性では、「指示的両親群」と「両親モデル群」の両親からのサポートの活用に對する影響力には有意差がみられなかったり、「両親モデル群」のみが影響力を持っていた。このような女性差が生じた理由については、本研究の結果からは説明することが難しく、今後の検討が求められる。

最後に本研究の課題を述べる。まず、第1に本研究ではどの程度サポートを活用しているかといった、サポートの量的な側面に注目したため、サポートの入手の仕方といった質的な側面を検討することができなかった。このようなサポートの入手の仕方に関する個人差を捉える概念として、永井(2013)は援助要請スタイルを提唱している。援助要請スタイルには、必要ときに援助要請を行う「援助要請自立型」、必要がなくても援助要請を行う「援助要請過剰型」、必要があっても援助要請を行わない「援助要請回避型」がある。今後、援助要請スタイルを含めて検討することで、サポートの活用の多寡だけでなく、その入手の仕方に関する差異を明確にできるだろう。

第2に、サポートを活用することによる結果を検討しなかったことが挙げられる。斎藤ら(2015)や鹿内(2012)が示すように、親の指示的な態度や過干渉は内定の獲得や職業決定に悪影響をもたらしていたことを踏まえると、同程度サポートを活用していたとしても、親の職業への態度によって、就職活動や進路選択に及ぼす効果は異なる可能性がある。

第3に、全体的に男性の調査対象者が53名と少なかったため、クラスター分析を行った際に、各クラスターに含まれる調査対象者の数が少なくなってしまうことが挙げられる。そのため、サンプル数を増やして再度検討を行ったとしても、同一のクラスターが抽出され、本研

究の知見が再現されるのか検討する必要がある。

引用文献

- 朝日新聞 (2010). 心も凍る就職氷河期 朝日新聞 2010年12月27日.
- 北見 由奈・茂木 俊彦・森 和代 (2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究——評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響——, *学校メンタルヘルス*, 12, 43-50.
- Lease, S. H. & Dahlbeck, D. T. (2011). Parental influences, career decision-making attribution, and self-efficacy. *Journal of Career Development*, 36, 95-113.
- 松田 由希子・前田 健一 (2007). 大学生の職業選択未関与におよぼす自己効力感と親や友人からのサポートの影響 広島大学心理学研究, 7, 147-158.
- 松田 侑子・新井 邦二郎・佐藤 純 (2010). 就職不安に関する研究の動向 筑波大学心理学研究, 40, 43-50.
- 水野 雅之 (2015). サポート資源の認知と活用が進路選択および就職活動に及ぼす影響 平成26年度筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文
- 水野 雅之・佐藤 純 (2014). サポート資源の認知および活用と就職活動の関連——就職活動不安および活動量, 就職活動中の精神的健康に着目して—— キャリアデザイン研究, 10, 61-73.
- 永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成——縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—— 教育心理学研究, 61, 44-55.
- 斎藤 嘉孝・梅崎 修・田澤 実 (2015). 就職活動中の大学生に対する親の関わりが内定獲得に与える影響—家族の“ベース”機能に注目して— キャリアデザイン研究, 11, 97-106.
- Saka, N., Gati, I., & Kelly, K. R. (2008). Emotional and personality-related aspects of career-decision-making difficulties. *Journal of Career Assessment*, 16, 403-424.
- 佐藤 有耕 (2015). 親の職業と青年期の子どもの親子関係との関連 筑波大学心理学研究, 49, 45-56.
- 佐藤 有耕 (2016). 親の職業との関連でみた大学生の子どもの心理的特徴——医学部生と教育学部生を対象として—— 筑波大学心理学研究, 51, 71-81.
- 鹿内 啓子 (2005). 大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因 北星学園大学文学部北星論集, 42, 69-88.
- 鹿内 啓子 (2012). 大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連 北星学園大学文学部北星論集, 49, 1-11.
- 下村 英雄・堀 洋元 (2004). 大学生の就職活動における情報探索行動：情報源の影響に関する検討 社会心理学研究, 20, 93-105.
- 高木 紀子・柏木 恵子 (2000). 母親と娘の関係——夫との関係を中心に—— 発達研究, 15, 79-94.
- 塚脇 涼太・森永 康子・坪田 雄二・柘植 道子・平川 真 (2012). 理系大学生の進学動機とその規定因 広島大学心理学研究, 12, 1-14.